

SHOW HEY シネマールーム

★★★

モリのいる場所

2017年/映画
配給：日活/99分

2018 (平成30) 年6月2日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督、脚本：沖田修一

製作：新井重人、川城和実、片岡尚

出演：山崎努、樹木希林、加瀬亮、
吉村界人、光石研、青木崇高、
吹越満、池谷のぶえ、きたろ
う、林与一、三上博史

■■■ショートコメント■■■

◆タイトルを見ても何の映画かサッパリわからないし、97歳まで生きた画家・熊谷守一の94歳当時の仙人のような生きザマを描いた映画と聞いても、そのイメージはサッパリ湧いてこない。しかし、チラシの写真を見て予告編を観れば、そのイメージがたちまち一発で！

◆公式サイトによると、熊谷守一の魅力は次の通りだ。

熊谷守一は、1880年生まれ。早くから才能を認められながらも、絵を褒められようとも有名になろうとも思わず。絵で家族を養えるようになったのは50歳を過ぎたころ。42歳のとき、秀子（24歳）と結婚。1932年、豊島区に自宅を新築し、1977年亡くなるまでこの家で暮らした。いま熊谷守一が注目されるのは、その常識にとらわれない生き方、清貧にして豊かな人生が現代人を魅了するだろう。この並外れた個性を持つ夫を深く理解して人生をともに歩んだ妻との夫婦のあり方もまた、私たちが魅了してやまない。芯の通った生き方とチャーミングな人柄、枯れることのない好奇心とともに生涯現役として過ごしたしなやかな強靭さ、草木が茂った生命力あふれる庭に、豊かな人生とはどんなものであるかを教えられる。本作は、熊谷守一という人と芸術のエッセンスを見事に凝縮させた映画なのだ。

◆さらに本作のチラシには、次の紹介がある。すなわち、

名優・山崎努と樹木希林 円熟の夫婦を味わい深く 人生が愛おしくなる珠玉の物語
山崎努演じる画家モリ（熊谷守一）は94歳。猫、蟻、揚羽蝶、鬼百合・・・毎日、庭のちいさな生命たちを飽くことなく眺め、絵を描いてきました。50歳を過ぎてようやく認められ、近頃はどうか暮らせるようにはなりましたが・・・相変わらず周囲の期待通りには筆が進みません。

樹木希林が演じる妻・秀子は76歳。時流にも無頓着な夫と世間の間に立ち、時に光と影を包み込み、毎夜アトリエに送り出します。この夫婦の52年間は、決して平坦ではありませんでした。子どもを亡くす経験もしました。二人は、じかに優しい言葉をかけあうことはしないけれども、ふと漏らす言葉に互いへの深い敬意と愛情がうかがえるのです。

山崎努と樹木希林一日本映画の至宝たる名優が演じる老夫婦の佇まいには、長い歳月を生きた深い絆が感じられます。ただ二人がいる。その姿だけで感動が心に広がるのです。

◆また、本作の物語は次の通りだ。

庭と生き物を愛し幸せに暮らす夫婦に、マンション建設の危機が忍び寄る。陽が差さなくなれば生き物たちは行き場を失う。慈しんできた大切な庭を守るため、モリと秀子、それぞれある行動にでる・・・

◆それにしても、30年間、ほとんど自宅と庭から外に出たことがないというモリの人生はすごい！本作は、彼が94歳つまり1974年当時の物語(?)だから、本作に登場するような東京の豊島区では、マンション建設に伴う土地の立ち退き問題はあっても、1980年代の強力かつ質質な地上げ問題はまだ発生していない。したがって、本作に登場するマンションオーナーの水島(吹越満)や工事現場監督の岩谷(青木崇高)との交渉は牧歌的で、それが本作にほど良い味付けを与えている。ある意味、モリは良い時代に97歳で死亡したといえるかもしれない。

そんな都市問題の視点からも、ラストに空からのカメラで映し出されるモリの一軒家の存在をしっかりと考えたい。

◆本作では、昭和天皇から「何歳の子どもが描いた絵ですか？」と尋ねられたモリの絵をたっぷり鑑賞することができないのは少し残念だが、それ以上に『モリがいる場所』というタイトル通り、これぞ唯一無二と思われるモリの生き方をしっかりと感じ取ることができる。また、本作では、樹木希林の円熟した演技が最大の魅力だが、同時にカンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した是枝裕和監督の『万引き家族』(18年)で、一家の要となるおばあちゃん役を演じていた樹木希林が、本作ではモリから「あいつが居なくなったら一番困る。」と言われるほどの強い信頼関係で結ばれる妻・秀子役を淡々と好演しているので、それにも注目！

◆本作は、予想通りの内容で予想通りの出来。また、予想どおりの演技力と予想通りのユーモアでいっぱい。したがって、それなりの良作、佳作であることは間違いない。

しかし同時に、近時の邦画は若者向けの映画と本作の様な「老人向け」の映画(?)に完全に二分されていることを実感。

2018 (平成30) 年6月5日記